# 「ヤコブ・メッケル」の家系

増山雄三

もう半世紀ほど以前の事だが、私はドイツのヂュセルドルフで開催された、国際溶接学会で論文を発表するため、ホテルに滞在していたある朝、日本語が少し分る、ドイツ溶接学会の理事長に伴われて、一人の若いドイツ人が訪ねてきた。

彼は私を見ると、まるで旧知の様に微笑んで、日本語は出来ない様だったが、日本字の名刺を持っていてそれを渡し、そこにはアンドレアス・メッケルとあり、一度、日本人と話をしたかったと言い、来訪を詫びた。

それで私はその名刺をみて、ひょっとして貴殿は、明治時代に日本陸軍を指導した、ドイツ陸軍参謀の「ヤコブ・メッケル」の曾孫かと聞くと、ヤコブは私にとって、大伯父にあたりますといって、突然の非礼を詫びた。

それはそれとして、このヤコブ・メッケルは、明治十八年に日本に来て数年間滞在したが、それ以前の日本陸海軍は、明治三年にフランス陸軍から教師団を招き、編成から軍服に至るまでフランス式にしていたが、そのフランスが、明治三年（一八七〇年）に、**普仏戦争**でドイツに敗れてしまったのだ。

それで日本は、ドイツの軍制と戦術を学び導入するため、メッケルを招聘したのだが、ドイツは彼を必要としていたし、メッケルも気乗り薄だったものの、遠い日本にやってきて、日露戦争では、満州における野戦に大きな影響を与え、そして勝利に貢献した。

こうしたドイツの戦術を開発したのは、メッケルの師匠だった**モルトケ将軍**で、その方式は実際的で観念性は殆どなく、これを習得すれば、誰でも一定の効果を挙げる事が出来たので、日露両国では、民族性の違いはあるとはいえ、満州の野で衝突した日本軍が、ロシアに勝利する事が出来たのである。

それで私は、本を読み知っていた日露戦争の事実を、学会の理事長を通じ、メッケル青年に話したが、ただ日本から帰ったメッケルの晩年は、暫く不遇だったようで、陸軍大学校の教頭から参謀本部に進んだ後、少将で陸軍を去り、ベルリンの西郊で隠棲した。

それは、四十半ばの頃の彼は、思慮深い人物なら当然避けるはずの、友人の夫人と恋愛関係になってしまい、少年の様な一途さでそれをやってしまったというが、青年は「その夫人と隠棲した後、結婚した」と話してくれたが、それを日本流で言えば、好きな女のために、二千石を棒にふったという事だろう。

そして青年は、その後に弟の子が作家になり、彼が書いたメッケルの伝記を呉れたが、彼は大学卒業後に会社勤めをせず、日独経済事務所という所で、いま専務理事をしているというが、大伯父のような戦争に関与せず、日本とドイツのために尽したいという。

そして彼の兄は、ベルリンで絵を書いたり

しているというが、それを知ると特異な天分が感じられ、もし、戦術というのが緻密な計算から離れ、芸術作品として成立する世界とすれば、「ヤコブ・メッケルの家系」には、そうした才能の血が流れているのだろう。

令和四年八月